

風景デザインレター from 九州(第 19 号)

今回は、少し系統の違う書籍の紹介です。内容は、豊界であったり、妖怪であったりと、おどろおどろしいのですが、日本という国の姿、日本人の物の捉え方については大いに参考になるのではないのでしょうか。

鎌田東二の「神界のフィールドワーク」を拾い読みしながら

【裏の風景】

外国、キリスト教社会では神の存在に対して悪魔が生まれてきた。日本では、同じく神の存在に対して妖怪が生まれてきた。「正」と「悪」がキリスト社会であるのに対して、「表」と「裏」が日本社会の姿であるというようなことが書いてある。NHKの連ドラ「ゲゲゲの女房」の影響もあり、水木しげるブームがすごい。自分も、いっばしの水木ファンであったし、水木しげるの東海道五十三次なんて美術本？のようなものも持っている。自宅の机の前壁には、「なまけ者になりなさい！」という水木しげるの色紙が、ウルトラ様と並んで、相当前から張ってある。さて、そのことはどうでもいいのだが、この表と裏の関係で構築されている日本という世界であれば、当然、日本人の物の見方、ここでは風景についても同じようなことがつきまとうのではないかと言うことで、今回は、「裏の風景」について考えてみる。

これまで、考慮してきた風景デザインの基本は、健全な風景があることが前提で、その風景が病んでいたり、ヤクザ的に世間様の迷惑になるような要素がはいってきたりした場合に、治療したり、更生したりすることが必要であると考えてきた。しかし、風景の姿にも、「表」と「裏」の風景があるのであれば、それは、このように単純ではない。「裏」というのは、病的では困るが、しかし健康美というものとは違う要素が入るである

う。さて、この「表」と「裏」のこの関係について、表千家、裏千家のような流派としての問題なのか、日なた(陽)に対する陰(影ではなく)の関係なのか、あるはもともと風景には裏はないのか、・・・。

私の直感的印象では、裏の風景の存在が、日本の風景、日本の街並みの風景に厚みをもたらすような気がする。

まず、裏の風景の代表的なものに、「裏路地」「裏通り」がある。この「裏路地」「裏通り」は、一軒家で例えると、裏口、あるいはお勝手口のように、日常生活のための出入り口で、生活空間であり、見てくれよりは利便性を優先させる空間である。玄関は、お客様やご主人様が出入りするところであり、多少の利便性は犠牲として、つねに正装の空間として、掃き清めていなければいけない、きれいにしていなければいけない空間である。

数年前より、この「裏路地」あるいは「路地裏」の風景というものに光が当てられるようになった。自分たちの生活空間であり、利便性第一ではあるが、そこに草花で飾り付け、縁台など置いて夕涼みをする、レトロではあるが癒しの空間として紹介される。

もう少し、路地裏から空間を広げてみると「裏街道」というものがある。これは、参勤交代のような正装集団が通る街道とは別に、沿道に宿場などが立派に整備された道ではないが、むしろ近道であったりする便利なルートだ。人生



的に「裏街道」というとヤクザ的な反社会的にも取られるような生き方をさすが、交通路としての「裏街道」は、バイパス機能も持ち、特定のポジションを有しているものと考えられる。

さて、もう少し空間の範囲を広げてみると、日本海側の地域を、昔は裏日本と呼んでいた。表日本に比べて、経済的にも沈滞していることもあるが、気候的にも北風が吹き荒び雪の深い暗い地域であるとの印象がある。しかし、この裏日本の風景の存在が、あっけらかんとした例えばカリブ地方のような単に陽気さだけでない日本の多様なそして多彩な風景・風土を形成しており、日本の文化の厚みを増すことに大きく貢献している。たしかに、裏日本という表現には差別的な事柄もありよろしくはないが、そこにもっている雰囲気は重要である。

地域性、地域らしさというものを考える際には、当然、主観的には、好みを優先するのであれば、好まないものは取り入れないようにするのだが、デザインは、主観だけで行うものではなからう。客観的というか、好みを超えた多彩

な文化を形成することを目指すのであれば、人間の生理的には好まないものもしっかりと導入することが必要ではないか。きれい、美しいだけの風景というものはうそを感じるが、そこには、この「裏」の存在で、逆に、表の存在が確かなものになるという関係がありそうである。

表の商店街が小ざっぱりと、きれいに整備されていることと併せて、趣ある、あるいは生活感あふれる路地裏が合わせて存在することが、その街の魅力を確かなものとするそんな気がする。

水木しげるの故郷境港では、妖怪のモニュメントを街に配置し、観光客を呼んでいると聞く。行ったことはないのだが、そこに、裏日本特有のなにか少し妖怪的な風景が街全体にぼんやりあるとすごいのだかと思ってしまう。お化け屋敷のような街づくりをする必要はないのだが、隣の出雲が神であれば、境港は裏としての妖怪という組み合わせであり、その対比を考慮した街づくりというものも考えられる。少なくとも、出雲では、出雲大社を中心とした神々が集まる場所としての神々しさを街づくりに反映させることは、肯定的に受け止められるであろうが、妖怪という裏の存在を街づくりのコンセプトにすることは少なくとも受け入れがたいものと想像される。しかし、キリスト社会の正と悪の「悪」をコンセプトに街づくりをすることはあり得なくても、表裏の「裏」の魅力を活かしたまちづ

くりというものはあり得ると思う。また、「裏」の持つ奥深さというものへの理解や認識が、日本の風景デザインの多彩な展開には必要ではないのだろうかとも思う。

例えば、「裏風景」という写真を撮ろうとしたらどういうものになるのだろうか。と、考えると、ふと以前書いたことのあるアラキーこと、写真家荒木経惟の写真がそれに該当すると思いつく。日常的な風景、作りものでない、実際の生活感のあるアラキーの写真に写しこまれた風景。これは、まぎれもなく、「裏風景」であろう。仮にそうだと仮定すると、次に、裏風景のデザインというものはどういうことになるだろうか。おそらく、表風景以上に、上から目線でもの言うものでは到底なくて、そこに住んでいる住民の生きざまが映しこまれるものであろう。かといって、「裏路地」は、個人の家の庭や部屋の中のようにプライベート空間として治外法権的に独立しているのではなく、少なくともパブリックの空間である。人様にお見せする場所ではないのかもしれないが、かといって、勝手気ままに散らかし放題の空間というものでもない。おしゃれではないが、あるいは、化粧を施しているわけではないが、そこに住む人々の心が直接反映する空間である。

「裏風景」というものは、お客さんを迎える空間ではないため、シンボリックであったり、おしゃれに整備されている空間ではないのだが、隣近所や仲間内の付き合い

いのために存在する空間で、また、このような空間は子供の遊び場の空間でもあり、ついでに言えば、その街に住んでいる人々にとっての原風景となりうる風景である。

以前、長崎街道に属する道路空間に関するデザインを行った際にも、デザインを検討する幹線道路空間と、一皮裏側の裏道の存在との、空間の二重三重構造のありかたに関する議論があった。その時は、残念ながら思いがここまでいきついていなく、ネットワークの問題として片付けたが、むしろ、そこで生活している人々の深層風景として、裏道・裏路地を捉え、表街道の空間との一対で考えるべきであったのではないかと今は思う。この裏道「裏風景」という考え方と、表の道路デザインとが一体になって初めて、単に表層的でない地域性、地域らしさをもった沿道空間が生まれるのではないかと、今は、そう思う。

【続く】